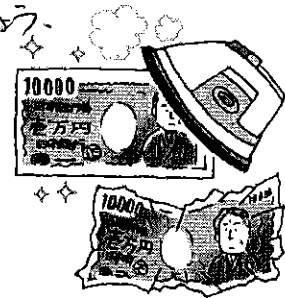


26(土) まいど、倫理号です。カタカナ字に好む違つた言葉に存心でかき写す。漢字は良くと平に切つて、今日は甲斐も違つて好む。

「慣れ」は不当はいい人だの

但し緊張感がある心こそ、
「成山の果」に「なつたほう 実践はほう」
を「運ぶ」に「アキ」鳥

「ナレ」と「アキ」



え・たむらかずみ

三月のテーマ

慣れた時こそ

夕

イトルを見て、「新しい連続ドラマ？」と思う方がいる

かもしれない。「慣れ」と「飽き」をカタカナで表記したのですが、通常、漢字で書かれる字が、見慣れないカタカナになると、途端にイメージしにくくなるものです。

何かに「慣れ」という状態は、心の平静さを保てる反面、心に隙を生じさせることもあります。仕事や人間関係でも、時の経過と共に慣れが生じ、それは時に緊張感を喪失させ、失敗の遠因にもなりかねません。

倫理法人会で学ぶA氏は、入会して二十年になります。「モーニングセミナー(MS)で『万人幸福の葉』を読むたびに、今でも毎回新たな発見がある」と語ります。

一方、B氏は入会して一年です。当初は所属単会のみならず、他会のMSにも積極的に出席していました。しかし、次第に講師の話も耳にしたものが多いと感じるようになり、新鮮味がなくなつたといえます。退会も考え始めました。同じように学びながら、A氏とB

氏の差はどこにあるのでしょうか。

慣れが進むと、「飽き」の状態に陥ることもあります。飽きは目の前にある学びのチャンスをも、自ら逃してしまふ心です。

そうした意味で、慣れが黄信号だとすれば、飽きは心に灯つた赤信号だといえるでしょう。物事にすぐ飽きてしまふ人は、どこに行つても成長の芽を自ら摘み取つていくようなものです。

前述のA氏にも、かつてB氏と同様の時期がありました。その時、先輩からこう問われたそうです。先輩からこう問われたそうです。「セミナーで聞いたことをどれだけやってみた？」

A氏は返す言葉がありませんでした。「あの問いのお陰で今がある。(どれだけやっているか)」と自分に問い続けている」と語ります。

儒教の祖である孔子は、弟子にこう諭しました。「これを知るをこれを知ると為(な)し、知らざるを知らずと為せ。是(こ)れ知るなり」と。すなわち、「知らないことを知らないとする。それが知るということだ」というほどの意味になる

でしょう。

孔子の教えにあらば、世の中には大別して二つのタイプの人があります。①知らないことを知らないと自覚できる人。②知らないのに知っている人と錯覚する人。①は成功の秘訣を知っている人であり、危険なのは②の人でしょう。

「知る」とは、知らないことの方が多いのだと、すなおに銘肝することから始まります。そこで初めて「知っているつもり」という錯覚から脱却できます。しかし、それで終わりではありません。

純粹倫理において「知る」とは、実践を伴うものです。実践なき机上の学びは雑念に過ぎず、それは時に人を責める武器になることさえあります。②の人が危険なのはそのためです。この学びは、あくまでも自身の学びであり、人に向けるものではありません。

慣れや飽きを感じた時ほど、自己を磨く最良のチャンスです。まずは今の自分をすなおに受け入れ、心新たに行動に移した時、また一歩成長できるのです。

参考資料：『論語』金谷治訳注(岩波書店)